

〈 英国推理作家協会賞受賞 〉

ひとりぼっちの 目撃者

デズモンド・ラウデン
真野明裕訳



The Shadow Run
by Desmond Lowden

HAYAKAWA
PUBLISHING, INC.

訳者略歴 昭和17年生，昭和42年
慶應義塾大学大学院英文科修士課
程修了，英米文学翻訳家 主訳書
「警察署長」ウノズ「マダム・タ
ノソーがお待ちかね」ラヴゼイ（以
上早川書房刊）他多数

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction
FT=Fantasy
HB=Hard Books

ひとりぼっちの目撃者

〈HM(172)-1〉

一九九二年五月二十日 印刷
一九九二年五月三十一日 発行

（定価はカバーに表
示してあります）

著 者

デズモンド・ラウデン

訳 者

真野明裕
まの あき ひろ

発行者

早川 浩

発行所

株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町二ノ二
郵便番号 一〇〇
電話東京(三三)五二二二(大代表)
振替口座番号 東京六四七七九九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求
めの書店にてお取替えいたします。

印刷・信毎書籍印刷株式会社 製本・株式会社明光社

Printed and bound in Japan

ISBN4-15-078751-4 C0197

ミステリ文庫

江苏工业学院图书馆

モズモンド・ラウテン
真野用裕訳
藏書章

^m
h

早川書房

3177

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1992 Hayakawa Publishing, Inc

THE SHADOW RUN

by

Desmond Lowden

Copyright © 1989 by

Desmond Lowden

Translated by

Akihiro Mano

First published 1992 in Japan by

HAYAKAWA PUBLISHING, INC

This book is published in Japan by
arrangement with ROGERS, COLERIDGE & WHITE LTD
through THE ENGLISH AGENCY (JAPAN) LTD

マ
ノ
ト
に
捧
げ
る

ひとりぼっちの目撃者

登場人物

ジョフリー	}	ワイクリフ大聖堂付属校の聖歌隊員
モーバーゴ		
ハラム		
ラルストン		
ギャヴェイン		
ギリック		

ズイー……………ギリックの姉
メルキオー……………校長
ジェラルド・フレイザー……………副校長
モーンダ……………正オルガン奏者
ソーリ……………副オルガン奏者
ホルデイン……………数学教師
ハスケル……………強奪団のリーダー

ライニー	}	強奪団の一味
ジャック・シャノン		
バザー		
マイク・ウィットロウ		
マキーヴァー		
ガマー		
デイヴ・ロウアン		

ランドン・ヒギンズ……………シティの有力者
ラークーム……………輸送車の元運転手

第一部

1

大聖堂付属聖歌隊の列が石段を降りて広場に出てきた。列の後ろのほうに、体をゆすり踵を引きずる肥満児特有の歩き方をしている少年がいた。少年はジョフリーといい、広場をゆきかう車をぼんやり眺めた。と、一台の白いヴァンから赤い血が流れ出ているのが目に入った。「あれ、あの白いヴァンから赤い血が流れてる」と少年は言った。

まわりの少年たちが振り向いた。

「え、なんだって？」

「ジョフリーときたらまたとんでもない嘘をついてんのか？」

「ちがうよ。どうしていつもそうやって、ぼくが嘘をついてるって言うのさ？」とジョフリーは言った。

「嘘をつくからさ」

「とんでもない嘘を」

「おぞましい嘘を」

「肥満らしい嘘をな」

ジョフリーは顔を紅潮させた。「見なよ。あそこのあのヴァンを見てみなよ。白いやつ。オートバイの前の」

「ああ、見えるよ」

「じゃ後ろからばたばた垂れてるあれが見える？ 濃い赤い色をしたものが？……血が？」

「なにも見えないぞ」モーバゴという少年が言った。

「なにかあるにはあるな」ハラムという少年が言った。「うん、たしかに濃い赤い色をしてるけど、どうしてあれが血ときまつてるんだ？」

「血だからさ」とジョフリーは言った。

「嘘だ」モーバゴが決めつけた。

「今にわかるよ」とジョフリーは言った。

広場の車の列は、いつもながらの朝方の渋滞にひっかかって、ほとんど動いていなかった。ジョフリーは自分の前の少年たちを追いつ越して、急いで先へ進んだ。

と、背後から叫び声がした。「ジョフリー。ジョフリー」副オルガン奏者で長身のソーリが黒のガウンをはためかせて追いかけてきた。「なにをあわててるんだね？ どうして列を抜け出しているんだ？」

「ズボンのせいなんです。凶暴な軍隊蟻が中に入りこんで。おぞましい死へと彼を追いつ立

ててゐるってわけ」とモーバーゴが言った。

「よさないか」とソーリが言った。

彼はジョフリーの肩に手をかけて、引きもどした。少年たちの列は歩道を進みつづけた。列の左側で車の流れが一段と遅くなり、ほとんど停まってしまった。白いヴァンにだいぶ近づいて、ジョフリーの目はそれに釘づけになった。後部の白いドア。そこからしたり出ている薄い膜状の血。黒いアスファルトに点々と落ちた赤い滴。

「ずばり、血だよ」とジョフリーは小声で言った。

「ずばり、ペンキの缶がひっくり返ったんだ。さもないやトマト・ケチャップの荷箱がこわれたかだな」とハラムが言った。

「ずばり、あの中に不法入国者が二十人ばかり乗ってんのさ。甜菜ビートの根を食って赤いしょんべんをしてんだよ」とモーバーゴは言った。

「血だ」とジョフリーは言った。

かれらはヴァンの後部と同一線上に並び、ちょうどそれと同じ速度で進んでいた。「よし、ジョフリー、おまえの説をためしてみようぜ」とハラムが言った。

「どうやって？」

「よし、賭けよう。もしもおまえが車道に出て、その血とやらの指を突っこんで、なめたら十ペンスやるよ」

「それでエイズに感染しろっての？」

ハラムはモーバーゴのほうを向いた。「いつもなんかしら逃げ道があるんだな。この肥満児はきまって言い逃れする」

だがそのとき兩人とも振り返った。ジョフリーが行動を起こしたからだ。彼は車道に出て、ヴァンの後部に駆け寄り、その赤いものにちよつと指を浸した。そしてくんくん匂いをかいた。

三人の後方からまたソーリの声が飛んだ。「ほら、ジョフリー、いったいなにしてるんだ？」

ジョフリーは意気揚々と振り向いた。「血の匂いがしてます」

「なんだって？」ソーリは信じられないというように両手を挙げた。

それから五分後。他の少年たちは更衣室にいて、洗面台のまわりで水をかけっこしていた。だがジョフリーは仲間に入らず、一人て中等部の部屋へやってきた。

そこは長い薄暗い部屋だった。四壁の三方から古びた櫨の表彰額が見下ろしていた。

窓の下に艶消し塗装の卓球台が置いてある。磨き立てた床は白茶けて傷だらけだ。列をなす机は黒ずんて傷だらけ。学期の始めごとにジョフリーがいとわしく思うあの匂い、古い木と古い光沢……そして古い傷跡の匂いがした。

とんでもない嘘。

おぞましい嘘。

肥満らしい嘘。

ジョフリーは腹立たしげにアームストロングの机のところについて、アームストロングのラジカセを取り出した。してはいけないことなのは百も承知だった。ラジオは予習のあと三十分だけ、それもヘッドフォン使用という条件付きでかけていいことになっているのはわかっていた。だがジョフリーは気にしなかった。ヘッドフォンを傍らに置いて、アンテナをのばし、ラジオの第一放送に合わせて体を小さくゆすりながら窓辺にいった。

窓敷居にもたれて、外を眺めた。眼下の狭い市道は依然として車がつまっている。いつもながらの朝方の渋滞がいつもに増してひどいようだった。

と、突然またあのヴァンが目に入った。大聖堂前広場で見た、後部ドアから赤いものをばたばた垂らしていたあの白いヴァン。ジョフリーが血だと言い、匂いをかいでみてまさしくそうとわかった赤いもの。そしてあとになって初めて感じた寒け。

となると今同じ寒けをおぼえるのはなぜだろう？ ヴァンの前部には血はこれっぽっちも見えないのだから。窓に黒っぽい色ガラスをはめた運転台と、その後ろの広告文字も社名も入っていない車体があるきりだ。ただの白塗りの金属板。妙だ。

そのときいきなり、ことが起こった。

第一放送がかき消されて、ものすごい音が教室じゅうに響きわたった。まずガガという金属音。ついてベルのような高速のリリリという物音。それから男の声。ただしそれは声というより沸き立つようなすさまじい悲鳴だった。

「こんなかはひでえ修羅場だ。血の海だ、クソ、どこもかしこも」と声は言った。

ジョフリーは手に持ったラジオを見つめた。

「ウツズイのクソつたれは腕を半分なくしやがった。それにおりゃけつをやられた。そこらじゅう血だらけだぜ。この血ときたら」

ジョフリーはラジオのアンテナがまっすぐヴァンに向いているのに気づいた。ラジオを投げ捨て、助けてと叫びながら部屋から駆け出した。

だが部屋の外で出くわしたのはソーリで、ソーリは助けにはならなかった。汚い言葉と血のことを聞かされたときの助けには。ソーリはジョフリーを押しとどめようとしつづけた。きみはまずいことになったぞとしきりに言っただけ。

事実そのとおりだった。一、二分後に、ジョフリーは校長が呼びだすと聞かされたのだから。

2

緑色のフェルト張りのドアがジョフリーの顔のすぐ前にあった。「どうぞ」という大声が中から聞こえてきた。

ジョフリーは中へ入った。机のそばに人が二人、ソーリと、たてがみのような豊かな白髪

と赤いあばたのある大きな顔で、のっそりした大兵のメルキオー校長がいた。

こりゃたしかにまずい、大いにまずいぞ、とジョフリーは見たとつた。メルキオーがいつものつつけんだんな態度とはちがっていたからだ。教室からもどってきて、ガウンをほいと椅子に掛けたばかりという風情とはちがう。〈校長面談〉という書き入れの入った作文を手にとって、「おいおい、ジョフリー、こりゃどういうたわごとなんだ」と言っているのともちがう。

そう、メルキオーは静かだ、いつになく静かだ。椅子に深くもたれ、煙草で黄ばんだ一本の指をもう一本とまっすぐ突き合わせて、えらく物静かにしゃべった。

「中へ入んなさい、ジョフリー。ドアをしめて。なにがあつたのか正確に話してごらん」

ジョフリーは絨緞の自分のほうのへりぎりぎりのところに立った。咳払いして声が出るようにした。「あのー」と切り出した。「ぼくらは聖歌隊の練習で、昼休み前の最後の授業には出られなかったんです」

「それで？」

「で、大聖堂前広場を通ってもどってきました」

「それから？」

「それが、広場でのことだったんですけど、つまりその白いヴァンを見たんです……血が垂れてるのを」

「血だそうですね、校長先生」ソーリが口をはさんだ。「少なくとも、本人は血だと言っ